

# JICA駒ヶ根青年海外協力隊 訓練所25周年記念



# 訓練所の動向と 地域連携の歴史

## 1 初期の訓練

発足当時の「協力隊業務実施要領」に「事前研修」として位置づけられ、期間は2カ月の一般オリエンテーションと1カ月の技術研修との3カ月で、語学は全期間を通じて行うことが規定されている。

第一陣31人（うち女性5名、フィリピン、マレーシア、カンボディア、ラオス）の訓練は、昭和40年10月11日から2カ月間を当時の海外移住事業団海外移住センター（当時、横浜市根岸）において、一般オリエンテーション及び語学、職業訓練校や団体等での技術研修が行われ、その幕を開けた。

この訓練は、協力隊にふさわしい隊員の養成を目的に「日本と全てが異なる厳しい環境のもとで、苦しみや孤独感に耐える強い忍耐力と社会奉仕の精神を養う」、つまり心身の鍛錬に重点がおかれていた。語学（現地語、英語、仏語）や任国事情、技術強化訓練に加えて、日本人としての一般常識の学習にも力が入れられ、隊員は日本の若き世代の代表たれ！という意気込みがうかがわれる。

## 2 訓練方式の大刷新

1968年（昭和43年）3月、協力隊事務局とともに自前の訓練所の施設が完成し、以降1972年（同47年）まで上述した訓練方式による3カ月間の訓練が年3回実施された。

そして、事業発足8年目を迎えた1973年（同48年）、事業全般の整備拡充が進められるなか、派遣前訓練についても大刷新が実施された。年2回の募集と一訓練期間を16週間（4カ月）とする年4回訓練に改め実施することになった。広尾訓練所では訓練前半の8週間は座学と語学、後半8週間は語学集中訓練として代々木訓練所（オリンピック記念青少年センター施設を借用）で行い、刷新の最大の狙いである語学力の強化に向け、実際的な会話能力の向上が図られた。

## 3 現地語学訓練の導入

昭和48年度から、「任国において言葉の運用能力を高め、風俗習慣をも学び、協力隊活動への心構えを醸成させる」ことを目的として、現地語学訓練を実施した。語学力強化は任国からの強い要望でもあり、更なる語学力向上を図る意味からも、特に、「仏語」「スペイン語」については赴任途次の第三国における語学研修を開始した。1974年（昭和49年）から、中南米地域派遣隊員を対象にグアテマラにてスペイン語研修を始め、その後、同国の政情不安から1984年（同59年）に訓練場所をメキシコ・クエルナブাকাに移し、実施してきた。また、アフリカのフランス語圏派遣隊員を対象に、1982年（同57年）からフランス・ヴィシーにて、フランス語研修を開始した。その他地域の諸国においてそれぞれの任国に事情に応じ、プログラムを開発し現地訓練を実施してきた。

また、1987年（同62年）の協力隊運営委員会においても、語学訓練の効率を高めるために、国内での訓練を基礎的なものに留め、国、地域、あるいは語学別の訓練を整備し、現地において訓練する方が良いとの提言がなされた。

これらの状況と提言を踏まえ、昭和63年度の派遣前訓練期間を従前の約90日間から2週間短縮し、77日間として現地訓練をより強化拡充することを目的として、次の指針に沿い、各在外事務所での検討を進めることとした。

①語学修得に重点を置く。②期間を1カ月とする。

以上の経緯に基づき、各国の現地訓練の強化・拡充の実態の把握、上記方針に沿った内容の実施促進、合わせてさらなる改善方法を探ることを目的として、平成元年度に事務局内に「現地訓練強化拡充計画調査」作業部会を設置し、1990年（平成2年）2月まで約1年かけて検討、現地調査が行われた。（本調査結果については、「協力隊現地訓練強化拡充計画調査報告書」としてまとめられている。）

上述のとおり、スペイン・フランス語の両言語については、第三国にて語学訓練が平成6年度まで行われてきたが、隊員の任国への適応を促す上で現地にて行うことがより効果的であるとのことから、平成7年度（7年度1次隊）より、現地調査及び在外事務所からのアンケートを基に第三国からそれぞれの任国での実施に改めた。（一部治安上の問題からコロンビアはエクアドルにて、エルサルヴァドルはグアテマラにて実施）現在は、それぞれの任国で実施している。

## 4 駒ヶ根訓練所の開設

1979年（昭和54年）4月、長野県駒ヶ根市に第二の訓練所が完成した。広尾訓練所の1カ月間を導入訓練、駒ヶ根訓練所3カ月間となり、代々木訓練所に代わって駒ヶ根訓練所が語学集中訓練所としての役割を担うこととなった。駒ヶ根訓練所の開設にあたっては、地方における初めての協力隊訓練施設として地域社会との交流を図る派遣前訓練が課題とされ、地域の農家、福祉施設での所外活動が訓練カリキュラムに導入された。

広尾から駒ヶ根への移動時に3日間の座禅訓練を導入し、更に駒ヶ根訓練所修了後は再び広尾に戻り、終了式・壮行会等の派遣前諸行事が実施された。

また、隊員数の増加に伴い、1984年（同59年）からは、広尾・駒ヶ根両訓練所での3カ月間による自己完結型訓練が始まった。駒ヶ根訓練所候補生は訓練終了後に東京に移動し、両訓練所の候補生が一堂に会し、3日間の派遣手続き等の赴任前オリエンテーション及び諸行事（皇太子妃殿下のご接見、修了式、壮行会）が行われた。

## 5 二本松訓練所の開設

協力隊事業の派遣規模の拡大に伴い、1994年（平成6年）12月、第三番目の訓練所として二本松訓練所が開設され、平成6年度3次隊訓練から派遣前のオリエンテーション及び諸行事を含む全ての訓練について、同じ訓練実施計画のもと広尾・駒ヶ根・二本松三カ所同時平行で実施することとなった。隊員候補生は、隊員として各訓練所からそれぞれ帰省し、各任国へ赴任

することとなった。

また、二本松訓練所開設と合わせ帰国隊員・調整員経験を訓練業務に反映させるため、帰国隊員で組織されている（社）青年海外協力協会に対し実施業務の委託を開始した。現在は、広尾、駒ヶ根訓練所においても同様に同協会に訓練実施業務を委託している。

平成7年度からは赴任前オリエンテーション、諸行事を訓練日程に含め、77日間から79日間に変更し、現在に至っている。

## 6 訓練の強化拡充

訓練内容についても、随時検討が加えられてきた。特に語学訓練に関しては、1977年（昭和52年）に「語学訓練検討委員会」を設置し、外国語教育専門家による効果的な語学訓練のためのガイドラインが答申された。また、1991年（平成3年）には外部有識者の協力を得て、「派遣前訓練強化拡充検討委員会」が設置された。同委員会は、訓練実施計画や訓練手法、訓練施設などについて、ソフト、ハード両面から検討を行うとともに帰国隊員等を対象にした「派遣前訓練等に関するアンケート調査」も実施した。これらの検討結果は現在の訓練の基礎となっている。

さらに、協力隊事業発足三十周年の節目を機に事業の総点検を行ったが、その一環として、訓練についても訓練所を中心に「派遣前訓練改善検討委員会」を設置し、その結果は、「派遣前訓練改善提言書」として報告されている。また、その提言書をもとに平成8年度から毎年一回「三訓練所合同会議」を開催し、随時改善を加え実施している。

現在、同じ訓練実施計画のもと三カ所同時並行での訓練を行っている。各訓練所がそれぞれの特色を生かしつつも、相互の連携を密にして質の高い訓練を維持・発展させていくことが今後の課題でもある。

協力隊に参加する青年の価値観の多様化が進む現在、これまでの経験を踏まえつつ、いかに現地に即応した効果的かつ自主性を促進させる訓練を実施するか、今後に向けて更に訓練内容・運営方針を再点検していく必要がある。

事業総点検の中で特筆すべき点として「制服」の改善についての経緯を触れておく。

隊員候補生の制服は、「派遣前訓練実施要綱」



に訓練に使用する制服等を支給すると規定されており、事業発足以来から専用の制服を制作し訓練で使用してきたが、時代とともに度重なる改善を行ってきた。

1997年（平成9年）当時の制服は、隊員の評判も悪く、また、派遣国によってその色彩が好ましくないとの関係者からの意見もあるため、今後の在り方について検討すべく、若手職員も参加し改善検討委員会を設置した。

その結果、当時の制服は廃止し「紺色のブレ

ザー」（ボタンはJOCVオリジナル）上着のみを平成10年度1次隊より制作、支給することになった。制服は、単なる訓練着のみならず派遣中はもちろん帰国後も協力隊に参加した証として残すことができるものとした。合わせて、上着に着脱可能なオリジナルのエンブレムを制作し、訓練修了式に修了証書とともに支給することになり、現在に至っている。

（参考文献 国際協力事業団青年海外協力隊事務局発行「青年海外協力隊20世紀の軌跡」）

## TOPICS

### 訓練中に花咲く恋「駒ヶ根マジック」とは

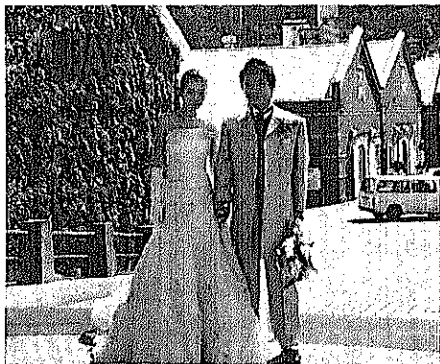
平成13年度第3次隊 佐々木 学

他人が編纂した辞書によると「駒ヶ根マジック」とは、「100人以上ものやる気満々の若い男女が、駒ヶ根訓練所という限られた敷地内において、1つ屋根の下で3ヶ月間生活をともにするという非日常的な環境下で起こる恋」とある。つまりそれは一時的なもので、任国に派遣されてしまえば、その感情はあたかも魔法のように消え去ってしまう、ということからこう言われている。しかし、この表現には私はいささかの疑問を感じる。中にはこのマジックを乗り越え結婚する人たちもいるからだ。実際私はマジックを経て結婚した。このことから、マジックには前述とは違うもうひとつの意味を捉えることができる。「駒ヶ根訓練所に来なければ一生出会うことのなかった者同士が、あたかも魔法のように導かれ互いに引き寄せあい、結ばれる恋」

年3回行われるこの訓練で毎回実に10組以上ものマジックが成立すると言われているが、そのうち後者に当てはまるものは少ない。その多くが3ヶ月間の訓練を終えた後、互いに遠く離れた国で、2年間もの過酷な遠距離恋愛を強いられるからだ。とは言え、マジック真只中の男女にとって、自分達が後者であることを疑う人はいないだろう。だからこの3ヶ月間は楽しいのだ。

訓練所にはこの若い男女を阻む数々の規則がある。混浴禁止。当たり前か。異性の部屋への立入禁止。これは本当である。訓練所は当然のことながら、任国派遣へ向け語学や異文化などの自分に足りない知識を吸収する場なので、自由になる時間がとても少ない。消灯時間になると、廊下や非常階段、未使用中の教室などで監視の目を盗んで密会する男女をよく見かけたものだ。

しかし当然ながらマジックが起きない人たちのほうが大多数である。それでもやはりここでの生活が楽しい理由は、候補生全員が農業や工業、医療やスポーツなど様々な業界で各々プロフェッショナルとしての技術を身に付けているからだ。つまり、自分の知らない世界を熟知している人との会話は、本当におもしろいということである。我々は、ここで学ぶ語学や様々な異文化教育はもちろんのことだが、この仲間達との出会いこそ



2年の任期終了後結婚しました。（同期奥様と）

が今後の人生における最大の財産になることを心得ていた。私の場合は妻というかけがえのない存在を見つけたわけだが。

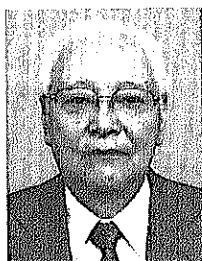
最後に、これから駒ヶ根訓練所の門をくぐる若者達へ一言。社会に出てしまえば、こんなにも充実した環境下で自分が興味のある分野を存分に勉強できる場などそうはない。この3ヶ月という限られた期間の中で、同じ目的を持った仲間達と共に、できる限りの知識を吸収し、必死にそして前向きに、少しずつしかし着実に進んでほしい。そうゆう仲間達の意識は目を見ればよくわかる。国際協力という同じ目標を持つ仲間達を大切にし、互いに感化しあい成長してほしい。

国際協力を志す若き日本の有志、青年海外協力隊に幸あれ。

# 訓練所開設25周年によせて

## 歴代所長からのメッセージ

### 駒ヶ根での生活を偲んで



昭和54年4月1日～昭和55年4月10日

初代所長

大畑 英雄

駒ヶ根訓練所の誕生は、なんといっても中央アルプスの大自然に抱かれ、南アルプス連山を望む壮大で、四季折々の美しい環境が協力隊事業関係者の心を引き寄せたことにあります。第2には、ご当地駒ヶ根市長様はじめ、市民の皆様方の熱意あふれるご誘致があったればこそであり、第3には、中央高速道路完成を控え東京からのアクセスが大幅に改善されたという事情でした。一方、設置準備の課題は、駒ヶ根市街地から訓練所までのアクセス、語学集中訓練の約20名の外国人講師の居所と訓練所への交通便宜供与、建設予定地での給排水上の周辺の人々への配慮のこと、及び、冬季の施設管理面（暖房費）の予算上の効率性と訓練所としての性格との折り合い（開かずの扉問題）等です。雑排

水の放流に関し、施設内に池を作り鯉を飼っていたことが忘れられません。これらは関係者のご理解とご支援で、乗り越えられました。様々な年齢層・社会経験の相違を前提とした一訓練120～130名の訓練生の3ヶ月合宿上のルール徹底や、特に語学効率上、個室か相部屋かの問題や施設内禁酒の問題は、今もって古くして新しい課題ではないでしょうか。しかし、訓練生にとって生涯の思い出となっていたり、「同期の桜」で現地派遣後も助け合い励ましあっている事実は、私どもには心温まるものです。また、所外活動で駒ヶ根市の福祉施設・病院・農家などへのボランティア活動、スポーツ交流で、地域の皆様との心のふれあいが生まれ、駒訓がご当地ご自慢の施設になったという、竹村前市長様の手記を読むにつけ本当に良かったと当時を偲ぶ次第です。

訓練所の皆様には、訓練生の人数も格段に増え、また、訓練所の仕事も多様化して、ご苦勞は重々拝察いたしますが、訓練生にとって他人への思いやりとか、協調とかは、現地生活につながるものですので、お互い十分意思疎通を図りながら、出来るだけ温かい思い出が輩出できるようご配慮いただきたく、祈念いたしております。

### 協力隊出発時に感じる希望



昭和55年4月10日～昭和57年3月31日

2代目所長

粕谷 甲一

協力隊発足時に、駐在員としてフィリピンに派遣され、駒ヶ根訓練所出発時に所長として赴任し、計15年の協力隊生活後はベトナム難民及びその国内の貧しい子供達とかかわって、20年余を過ごしたが、常に協力隊を見つめてきた。

そして今、次の2点で協力隊に大いなる希望を感じる。第1は、JICAのトップ談として「国益」の定義を「南の苦しんでいる国々の人々から、日本が頼りがいのある国と信頼されるようになること」と、淡々と語られるのを聞いたことであり、第2には、協力隊のトップに帰国隊員が任命されるようになったことである。このことを急に、ここに書く気になったのは、シエラレオネで極度の困窮と危険の中で、幼い子供達を守るためにとどまって献身している2人の日本人シスターのことを聞いたからである。「あの子供達に出会ってしまった」。それがここにとどまる唯一の理由である。そのような頃がJICAと協力隊の現実に生き続けることを念じつつ……。

## 開設25周年によせて



昭和57年4月1日～昭和58年6月30日

3代目所長

高橋成雄

赴任時の大きな課題は、駒ヶ根訓練所の運営の手直しであった。当時、派遣前訓練の充実、とりわけ隊員の語学力強化を目指し、駒ヶ根訓練所は専ら語学集中訓練を目的に設置された。従来の3ヶ月訓練を4ヶ月に延長、訓練カリキュラムは一般講義を2ヶ月、後半の2ヶ月を語学集中訓練に充てる、所謂2-2方式が採用される。その後現地訓練の導入に伴い3ヶ月に戻され、各講義を1ヶ月間広尾訓練所、駒ヶ根訓練所は2ヶ月間語学集中訓練を実施する事になる。その後、隊員倍増計画の推進に伴い、現在の各訓練所ごとに自己完結型が定着、更に現地語学訓練の充実によって国内の訓練日数が短縮された。当時駒ヶ根訓練所の収容は100名、宿

舎は個室、洗濯機を設置するなど、訓練生の生活上の負担軽減に努めた。ところが青年海外協力隊運営委員会は、派遣前訓練の趣旨から個室は望ましくない、集団生活を維持するよう指導。これに伴い訓練所運営の手直しとなったのである。さて、個室として設計された施設を如何するか、考えられたのが3室を4人の候補生で使う3-4方式、今までの個室に2段ベットを入れ、2人の相部屋とし、2部屋4人で1つの学習室を使用する事で何とか切り抜けたのである。此によって収容力が130名となった。中庭にあった国旗掲揚塔はその下での朝の集いが出来なくなり、現在の玄関に移した。所長宅は、敷地内、南大池側にある、何故か？伴事務局長の構想は、訓練所を1つの塾と見立て、訓練所長は塾長として、常に隊員候補生と共に在り、生活を共にしながら指導に当たれ、従って訓練所が扱う人数を100名としたのも其処にあった。ボランティアとは人間の心で動くもの、隊員候補生の心を燃やすには、先ず、塾長が、スタッフが燃えなければ、相手の心を動かす事は出来ない。こんな合言葉が懐かしい。益々のご発展を願うと共に、協力隊のよき伝統、良き気風を継承される事を願ってやまない。

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所  
開設25周年記念に寄せて

昭和58年7月1日～昭和61年7月15日

4代目所長

小野睦一

駒ヶ根訓練所の開設25周年記念心からおめでとうございます。私にとっての20年前を振り返りながら過ぎし日の一端を述べてみたいと思います。駒ヶ根訓練所赴任当時は40代を越えたばかりの若さとエネルギーに満ち溢れていた時期であり、隊員候補生と共に寝食し、走り、学び、素晴らしい自然の中での野外訓練では一緒に汗を流した思い出深い3年間でした。

そして素晴らしい訓練所スタッフ・語学講師及びTBSの皆様と共に、地元駒ヶ根市及び市民の皆様のご支援ご協力を頂きながら、

全力投球でチャレンジできた事は今も私の心に、駒ヶ根は第2の故郷として鮮明に記憶の中に残っています。

特に野外訓練で登った南アルプスの陣馬形山から眺めた中央アルプスの白き峰峰と駒ヶ岳・千畳敷カールの雄大さは、まるで映画のサウンド・オブ・ミュージックの世界であり、息を呑むほどの自然の美しさでした。また所外活動で候補生をいつも温かくお引き受け頂いた受け入れ先、長野県及び駒ヶ根市協力隊を育てる会、青年会議所、ロータリークラブ、ライオンズクラブそして山水会等の皆様が20年経った今でも鮮明に思い出されます。改めてこの場をお借りして皆様に心からの感謝を申し上げます。

そして私にとっての1番の思い出は昭和61年にモロッコ事務所へ赴任後、数ヶ月経って駒ヶ根市長様（当時竹村市長様）他21名の駒ヶ根市協力隊を育てる会の隊員活動視察のご一行が遠くモロッコまで来て頂いた事に大変な驚きと同時に感動をしました。市長様視察団ご一行はその後チュニジア、フランス（パリ、シャモニー）をご視察の長旅だったと記憶しております。

視察団最高齢者は山本様（元市議会議員で所外活動受け入れ先）の70歳（当時）でした。到着後モロッコ外務協力省等への挨拶を終え、早速首都ラバトにある小学校を訪問し、駒ヶ根市の小学生から預かってきた絵の交換を行いました。

夜は隊員主催の歓迎パーティーが開催され、モロッコ政府関係者や隊員と久方ぶりの交流が

行われました。翌日から3日間の予定で地方隊員の活動現場を廻り、隊員達の活動を熱心に視察し、また激励して頂きました。あれから既に20年の歳月が経ち感慨深いものを覚えます。

これからも駒ヶ根市民の皆様にも愛される訓練所であって欲しいと願わずにはおれません。

## 駒ヶ根訓練所に期待すること



昭和61年8月10日～平成2年3月31日

5代目所長

渡部正剛

協力隊事業が創設されて40年、駒ヶ根訓練所が発足して25年、永年事業に携わってきたひとりとして誠に感慨深いものを感じます。

この間、駒ヶ根訓練所が災害や事故に遭遇することも無く、25年の道程を着実に歩んできた歴史には、JICA職員、語学講師、TBS職員など諸氏の協調と献身的な働きが、鮮やかに織り込まれています。

青年海外協力隊事業は「青年による海外ボランティア事業である」ことは周知のとおりです。訓練所は海外のボランティア活動に参加する青年たちの相互研鑽の場であり、ボランティアの本質を理解し、参加の意識を高める場所なのです。では、ボランティアとはどういうことでしょうか。

最近、ボランティアという言葉が、日常生活のなかに浸透しつつあることは大変結構なこと

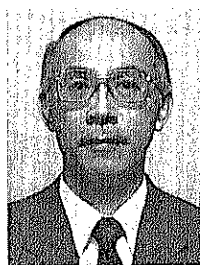
ですが、時として「安易な代替え労働者」の如く、誤った概念で捉えられていることがあるのは誠に残念なことです。

「ボランティア」という言葉の語源は、ラテン語のボランタス（自由意思による行動の意）から来ています。キリスト教の影響を受け、西欧では「人間の理想的な社会生活づくりのために、人間と生命を愛し、共に生きる社会の実現をめざして行動する心の働き」と理解されています。

東洋にも古来から類似の思想があります。儒教には「惻隱の情＝孟子のいういたわしく思う心」の教えがあり、日本には仏教の「布施」の教えがあります。布施とは、自分にとって、相手にないものを与えることであり、布施は「与える人」「受ける人」「与える物」の3要素があって初めて成立する（三論空寂）ものです。「与える側」と「受け手側」に優劣関係はなく、奢らず、卑屈にならず対等の立場にあるものです。この布施の思想に、協力隊事業の理念と相通じる類似性があります。

21世紀には、国の内外を問わず人間と人間の絆が一層求められる時代だと思えます。駒ヶ根訓練所はここに集う青年諸君の精神的な拠り所を残しながら、21世紀の格調高いボランティアという精神文化を追求し、優れた人材の育成に努めて欲しいと念じています。

## 市民の皆様と共に



平成2年4月1日～平成3年8月31日

6代目所長

坂牧嘉昭

所長として単身赴任いたしました。駒ヶ根は私の生家からも近く、離郷後28年ぶりの伊那谷での生活となりました。又、昭和53年10月に駒ヶ根訓練所準備室兼務を命ぜられ、新訓練システムの検討と実施の準備に関わり、最初の候補生を新訓練所へ引率したこともあり、「懐かしく嬉しい赴任」でした。

『駒ヶ根市民に慕われ、愛され、身近に感じられる協力隊』をモットーに、訓練所職員や講師や候補生が、市民の皆さんとできる限り多く接触できるように心掛け、候補生には「山紫水

平成2年4月、百花繚乱の駒ヶ根に6代目の

明の素晴らしい環境の中、市民が挙って声援してくれるこの駒ヶ根で訓練できることを幸運と思い、一所懸命訓練に励もう」と呼びかけ乍ら、平成3年度1次隊まで4回の訓練に、スタッフ共々全力投球で取り組ませていただきました。

幸い、中原市長はじめ市役所の皆様、駒ヶ根市協力隊を育てる会の皆様、商工会議所・青年会議所の皆様、所外ボランティア活動受入先の方々、昭和伊南病院、警察、学校、保育園の皆様のご協力、土曜日曜や市民行事の日に候補生や講師と親しく交流し緊張を解してくださいました市内の様々な皆様のご協力を得まして、候補生のみならず家族随伴の職員や語学講師も安心して訓練に打ち込むことができ、効果的な訓練ができたと確信しています。これも先輩諸氏が年々培ってこられた駒ヶ根市との友好関係

の賜物と思います。リラの植樹、中学生の体験入隊、与田切川でのキャンプ、駒ヶ根市民マラソンへの参加等、路傍の土筆、空木の勇姿、2月の零下14度、巨大なツララとともに、記憶に鮮明です。

平成3年7月1次隊の出発で、駒ヶ根訓練所を巣立った隊員の数が増えました。25周年には1万名を越えた由。皆、駒ヶ根を第2の故郷と感じているに違いありません。これからもその数は着々と増えてまいります。今後とも駒ヶ根訓練所が駒ヶ根市民の皆様とともに歩み、逞しい隊員の養成とともに、駒訓卒業隊員OBを呼び込みながら、国際協力・途上国理解の発信基地、研修の場として、更に発展することを期待してやみません。

## 青年海外協力隊駒ヶ根訓練所 開設25周年に向けて



平成3年9月1日～平成4年12月31日  
7代目所長

長 倉 孝

私が駒ヶ根訓練所に勤務いたしましたのは、平成3年の2次隊が入所直前の頃から平成4年3次隊の入所直前まででした。訓練所勤務は初めての経験でしたので、隊員候補生を協力隊隊員像に導く事が出来るか少なからず不安がありました。自分自身が隊員経験者でもあったので、当時の隊員候補生が持つ一般的な価値観の違いはあったにせよ、「協力隊員」としての価値観の違いはありませんでした。しかし、候補生はYes No がハッキリしていて戸惑った事を覚えています。

当時の隊員候補生の平均年齢は26～7才でしたから、当然社会人として経験されてこられた人たちでしたので、今さら協力隊員像などを説いても果たして受け入れられるのか疑問が大きかった。しかしながら、訓練所スタッフの日夜の努力の甲斐あって、訓練初期は候補生にとって何らかの心の抵抗があったものの、訓練終了時には志した協力隊員になりきって任国へ出発

して行かれたように見受けられました。その裏には、訓練期間を通して、駒ヶ根市役所、協力隊を育てる会の全面的な支援と、所外活動などを通じて駒ヶ根市民の皆様方とのふれあい、暖かな眼差しがあったればこそその成果であったとおもいます。特に、印象に残るのは駒ヶ根青年会議所の方々の惜しめない支援を忘れる事は出来ません。事あるごとにJCの方々が訓練所を訪れてスタッフ、候補生との会話、ふれあいを持っていただいたこと。そして、訓練終了時には早太郎物語の現地語訳の絵本を用意していただいたことなど協力隊事業と一緒に支えてくださったことが思い出されます。

その後、私は海外勤務となりまして、一時帰国するたびに第2の故郷とも言うべき駒ヶ根を訪れ、当時のJCの方々とは旧交を深めております、と同時にこれだけ私の心の中に深く印象として残っていると言う事は、市民の方々が訓練所と一体となって「協力隊」を盛り上げて頂いた証ではないかと信じております。

今後の訓練所のあり方も、言うまでも無く「市民と一体となった訓練所」として、末永く益々発展していくことを願ってやみません。



## 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所 開設25周年によせて



平成5年1月1日～平成7年3月31日  
8代目所長  
金山昌功

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所開設25周年おめでとう御座います。

わが国が政府開発援助を開始して50年、青年海外協力隊は2005年には発足40周年を迎えます。

その協力隊語学強化訓練所として駒ヶ根に訓練所が開設され四半世紀、其の後協力隊参加希望者の増加等諸般の事情から総合訓練の機能を具備した訓練所と変革、爾来現在までここに駒ヶ根訓練所から1万人以上の隊員を開発途上の国々に派遣、それぞれの国の発展に寄与し、現在に至っております。

これはひとえに駒ヶ根市長をはじめ駒ヶ根市民のご支援、ご協力の賜物と有り難く感謝申し上げますと共に、今後ともJICA事業並びに協力隊駒ヶ根訓練所に対するご指導、ご鞭撻の

程宜しくお願い申し上げます。

開設当初100名の訓練候補生受け入れを目的とした訓練所施設から、協力隊参加希望者の増加に対応するため順次改築を重ね、現在は常時200名を越える隊員候補生の受け入れを可能な施設としております。

しかしながら我が国における社会構造の変化、教育教科の変革等々による第1次、2次産業に従事する技術者の減少、又国際社会においてはアフガニスタン、イラクに代表される地域紛争を多く包含し、世界平和に貢献する国際的ボランティア、特に開発途上の国々に必要とされている技術を持ち且つ、それらの国に対する真摯な情熱を持つ青年が治安や安全性の問題から、海外ボランティアへの参加減少が危惧されます。

又、近い将来少子化の影響で協力隊参加者の減少も我が協力隊にとって大きな問題を包含していると思えます。

今後はそれらの事を踏まえた協力隊事業の抜本的改変が必要ではないでしょうか。

今現在具体的な構想を持ち合わせては居ませんが、我々協力隊OB、OGがこれまで以上に協力し合い、より良い手法、方策を献策し、協力隊事業継続、発展に尽力しながら、其の主役である隊員確保を目途とした多くの応募者開拓へ協力したいと考えております。

## 駒訓25周年に想う



平成7年4月1日～平成9年10月30日  
9代目所長  
阿部憲子

協力隊訓練所が初めて東京以外の地・駒ヶ根に開設されたのは協力隊事業が創設されてから15年目のことでした。それから更に25年間、全国から多くの協力隊員候補生が駒ヶ根に集い、協力隊員として世界中の任国に巣立って行きました。現在、タイ国の地方都市・コンケン県に在勤していますが、20余年も前に協力隊員と同僚だったという現地の人から「日本のKOMAGANEとはどんなところか？」と尋ねられ、驚

いたことがあります。

私の駒ヶ根との最初の関わりは駒ヶ根訓練所の草創期に遡ります。訓練所施設の完成とともに東京から駒ヶ根に着任したのが1979年早春の頃でした。残雪を頂く中央アルプスを背にし、夕日に輝く南アルプスの連山を初めて目の当たりにした美しい眺望は忘れ難いものです。

駒ヶ根訓練所の開設にあたっての命題のひとつは「地域の人々との交流」を派遣前訓練のカリキュラムに取り入れることができるかということでした。そこで導入されたのが社会福祉施設や独居老人世帯、農家ででの奉仕活動を所定の課業とする「所外活動」でした。

今では普通名詞として定着した所外活動は、候補生が一訓練期に関わる活動回数は僅かながら、回を重ねて協力隊と地域との様々な交流の形を生み出してきました。受入先や協力隊を支えてくださる地域の人々と歴代候補生との四半世紀にわたる貴重な交流の足跡をそこに見るこ

とができると言えましょう。

再び駒ヶ根に関わる機会を得たのは約13年ぶりの1997年4月でした。この時期は250人の訓練規模を前提にした施設拡充の計画段階にありました。先ず実現したのが男女同規模とした浴室の改築でした。開設当初は女性候補生が1割に満たなかったのです。時代の変化と共に訓練

所の機能が広がり、協力隊派遣前訓練を核に地域の国際協力センターとしての期待に応え得る施設に発展している様子を誇らしく思います。

いつまでも「駒訓OB」にとって駒ヶ根回帰の拠り所となり続けるものであるよう期待しております。

## 駒ヶ根訓練所開設 25周年に寄せて



平成9年11月1日～平成11年5月31日  
10代目所長  
木内志郎

青年海外協力隊駒ヶ根訓練所開設25周年誠におめでとうございます。

思い起こせば私の駒ヶ根市との出会いは、昭和47年の派遣前訓練でDiscover Japanと題する国内研修旅行で訪れたことが最初でした。候補生数名で「伊那の勘太郎は実在の人物か？」という研究テーマを携え、伊那市の公民館で郷土史家の先生にお話を伺い、その翌日、菅の台を散策したことを昨日のように思い出します。

次に訪れたのが昭和49年に新訓練所建設用地の候補地であった駒ヶ根市の用地視察でした。確か9月か10月ごろだったと記憶しております

が、市役所の方に養命酒工場をご案内いただきました。その工場から見下ろす景色は、緑の絨毯を敷き詰めたように非常に美しかったことが、今でも鮮やかに蘇って参ります。名峰駒ヶ岳からのなだらかな稜線が、末広がり町中央を流れる天竜川に至る美しい山麓に、駒ヶ根訓練所が建設されて早や25年、感慨一入であります。

駒ヶ根市の四季折々の暖かくも厳しい中で、これから海外に雄飛しようと志し、全国各地から馳せ参じた多くの隊員のみなさん、そして温かいご支援をいただいております多くの市民の方々とともに、汗を流したことを懐かしく、かつ誇りに思っております。特にこれからもご尽力いただきたいことは、駒ヶ根訓練所が地域の人々とともに榮える、コミュニティー開発の拠点としての使命と意志を維持し続けていただきたいことです。国民参加型国際協力のもと前途有為なる青年達や、多くの国民の方々が世界の国々で、それぞれの得意な分野を生かし「村興し」、「町興し」に貢献することが、実は人間の安全保障に欠かすことのできない、非常に重要な事柄であると考えます。

## 遠国より懐かしむ



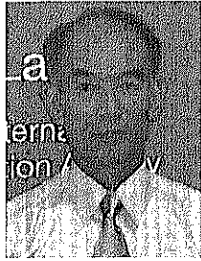
平成11年6月1日～平成12年11月30日  
11代目所長  
稲葉泰

今、中央アジアのウズベキスタン共和国の首都タシケントにおります。シルクロードの要衝として栄えた榮華を感じさせるお国柄です。駒ヶ根訓練所勤務は、まことに短い期間ながら、地元の方々の温かいご協力を得て本当に充実し

た日々でした。思い出のひとつひとつが今でもくっきりと心に塗りこまれています。

協力隊員が異口同音に言う「駒ヶ根に帰りたい」という気持ちは、私も世界のどこにいても同様に感じております。駒ヶ根の皆様のみならずのご発展と訓練所に対する一層のご理解、ご支援を心よりお願い申し上げます。

## KTC候補生に思うこと



平成12年12月1日～平成15年5月31日

12代目所長

平澤 昭 男

この原稿を書いている今、NHKのWorld Premiumでは、東北から東日本にかけての大雪を報じています。雪の無い地方に育ち、2001年1月の訓練が初めての体験だった私にとって、平成12年度第3次隊訓練が始まって3週間目ぐらいに伊那谷を襲った大雪はまさに忘れることの出来ないものでした。今でも天気予報で長野県に雪だるまがあると、必ずあのときのことを思い出します。高遠で行なわれた野外訓練は正に厳寒と雪の中。解体されたニワトリから流れる血が瞬く間に凍りつく中で、候補生からは、こんな寒中の訓練が任国での役に立つんですか、と怒られる始末。おまけに訓練所内で風邪が蔓延し、語学授業を受けられない候補生が続出して、訓練所長初体験としては散々の79日間でした。

KTCには結局2年6ヶ月在任したことになりますが、その間色々なことを学ばせて戴きま

した。現代の若者気質もそのひとつです。仕事の性格上、私と同年代の人間に比べて多くの若者に接してきたつもりですが、訓練所での濃密な接点には特異なものがあります。いわば当たり前のことなのですが、髪の色や服装など、見かけだけで判断してはいけない、ということが良く分かりました。中には首を傾げたくなる人もいましたが、総じて素晴らしい若者が揃っていたと言えます。

しかし一方で、KTCが地域の人たちの支援と理解で成り立っていることをもっと知って欲しい、と思うこともありました。昔のように、週末に酒を飲んで街で暴れる候補生は殆ど見なくなりましたが、協力隊は駒ヶ根市の財産、とってくれる市民の方たちがいて、KTCが存在していることをもっと知る必要があるのではないかと思います。

所外活動などでお世話になっている受入れ先には候補生の写真をアルバムに収め、恰も息子、娘のように思ってくれるところも多いのですが、当の息子、娘たちにとっては数多い訓練所行事のひとつに過ぎないためか、赴任後何の連絡も無い、ということが少なくありません。たった79日間のKTC生活ではありますが、市民の方たちの熱い思いに添えて1人ひとりの隊員が絆をつないでもらえば、もっともっと町の活性化に貢献できるような気がしています。

## TBS佐藤総括の思い出話

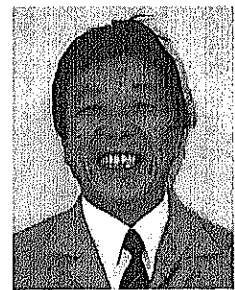
### 「早稲田の施設を借りて行った訓練奮闘記」

昭和63年隊員候補生増員に伴い、研修期間中ですが、研修棟（講堂含む）及び食堂厨房を増設することとなりました。

この間、訓練所では授業を行う事ができない為、早稲田実業高校駒ヶ根合宿所をお借りする事になりました。

工事が冬期間にもおよんだ為、設備担当者は合宿所の道路・駐車場の除雪、各教室の暖房の為にセットした灯油ストーブの早朝の点火と状態の確認、そして給油。食堂担当者は合宿所の狭い厨房での調理・配膳・そして後片付け。清掃担当者は厳寒期の慣れない古い木造の清掃。そんな状況の中、隊員候補生は朝起きて合宿所へバスで行き、授業が終わると訓練所に帰ってくるという不便な生活で日々を過ごしていました。

訓練所の管理と早稲田実業の管理と両立させるのに苦労させられましたが、今となれば私にとって懐かしく楽しい思い出となっています。



TBS総括  
佐藤敏雄

## 駒ヶ根協力隊を育てる会とは…

駒ヶ根市職員・駒ヶ根協力隊を育てる会事務局・協力隊週間実行委員会（略称：MWF）事務局 春日隆志

駒ヶ根協力隊を育てる会は、駒ヶ根の地へ開設された青年海外協力隊訓練所を「地域全体で支えていこう」と、昭和58年に発足し、市民、企業、各種団体など約400名で構成された団体です。

協力隊訓練所との連携をはじめとして、隊員や隊員候補生への支援活動、地元出身隊員の激励会、協力隊週間などのイベント実施など、国際交流の推進や地域住民の国際化意識の高揚に努めています。また、毎年、市民の方々のご協力により、書き損じ・未使用ハガキの回収活動を行い、集まったハガキを資金に、「小さなハートプロジェクト事業」として隊員活動を支援しています。平成4年以来、22件の案件を支援してきました。

今後も、「協力隊訓練所があるまち」として、これらの事業を通じて、協力隊訓練所、隊員や隊員候補生の皆さんを応援していきたいと思えます。



## MWF 協力隊週間紹介

MWFって何？MWFとは新しいプロレス団体ではありません！毎年開催している協力隊週間「みなこいワールドフェスティバル」の頭文字であり、「みなこい」は、近隣の宮田村・中川村・駒ヶ根市・飯島町の頭文字をとり、地域全体で取り組んでいこうとの姿勢を表しています。

駒ヶ根市には、日本全国で3箇所しかない青年海外協力隊訓練所があります。この貴重な財産を地域全体で盛り上げると同時に、地域と訓練所、隊員や隊員候補生の皆さんの交流の場として、平成6年から「協力隊週間 in こまがね・みなこいワールドフェスティバル」を開催しています。

協力隊週間中には、協力隊活動紹介パネル展をはじめ、訓練所見学ツアーや各国の料理を作る地球の料理教室、帰国隊員活動報告会など沢山のイベントが企画されます。また、メインイベントとして中心商店街を会場に、「こまがね国際広場」が開催されます。「食べる・協力する・体験する・遊ぶ・見る」という5つのテーマに基づき、各国の料理が味わえるワールドレストラン、各国の様々な文化を紹介するワールドブース、民族舞踊やパフォーマンスが楽しめるワールドステージ、会場内のポイントを巡るスタンプラリーなど国際色豊かで、大人から子供まで楽しめる内容です。市民と協力隊OB・OGそして隊員候補生との交流の場として、年々盛り上がりを見せています。



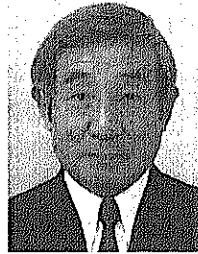
また、このイベントを支えているのが、MWF 実行委員会の皆さんです。駒ヶ根協力隊を育てる会のメンバーを中心とし、訓練所や青年会議所、商店街や郵便局、地域住民の方々など市内外の皆さんの協力により進められ、全て手作りで企画運営をしています。

今後も、このイベントを通じて「駒ヶ根青年海外協力隊訓練所は、地域にとって世界に誇れる社会的財産である」ことを、地域の皆さんと訓練所、隊員OB・OG、隊員や隊員候補生の皆さんと共に実感し、国際化のまちづくりに努めていきたいと思えます。

# 訓練所開設25周年によせて

## 訓練関係者の思い出

### 時に想う



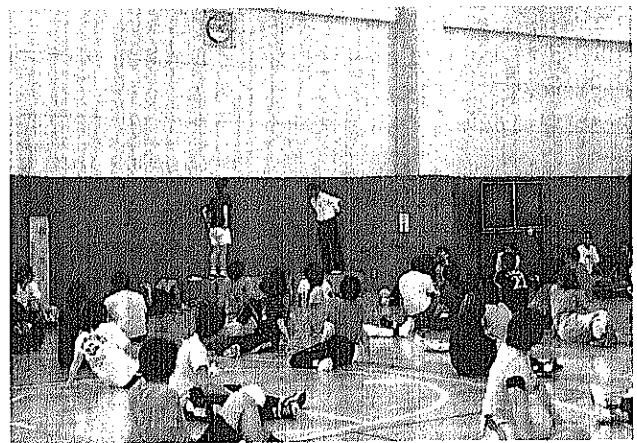
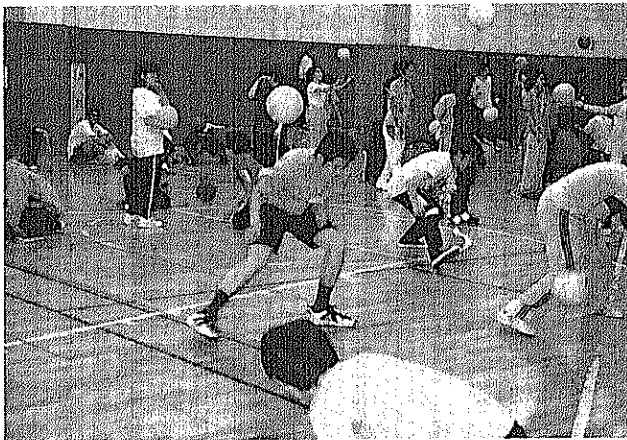
講座講師代表  
青山敏彦

貴重な実績を重ねられ、創立25周年を迎えられたこと心よりお祝い申し上げます。この時の意味を永年ラジオ体操の放送で体得したときの意味と合わせ、私なりに理解させていただき寄稿とさせていただきます。

NHKで毎朝放送されているラジオ番組を28年間担当いたしました。その間私にとっては10分間ではなく600秒として捉え、秒毎に伝えるべき内容を正確に刻む努力をしたものです。加えてラジオの向こうで数千万人のラジオ体操の愛好家が今日1日の元気と爽やかさを求めて一言一言を注目しておられる。こう思うと緊張度を高め最善を尽くす以外に答える道がない事を教わったのです。そこには経験に委ねたり、惰性に陥ったりは許されないのです。更に加えて、このラジオ体操が国民の健康増進をねらいとし

た国家事業であるからです。過去から現在と放送担当者は変わっているものの、誰もが共通の基盤に立って担当してきた故に、77年の歴史を築けたと考えているのです。昭和3年に誕生したラジオ体操番組は現在でも廃れるどころか、より一層その重要度が増しているとも言えるのです。

以上の体験を駒ヶ根訓練所の派遣前訓練や、駒ヶ根市との共催での国際イベントに参加させていただいた経験を重ねて感じたのは一致点が多く、常に深い敬意を表していたところであり、真に日々の真剣な取り組みの結果の25周年であるとお慶び申し上げます。変化の激しい今日ですが、今日までの実績を基に社会の要請に答えるべく益々の発展を期待申し上げます。



体育講座風景



## 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所 25周年にあたり



語学講師代表

Lobsang Tenzing Sherpa  
(ロブサン・シェルパ)

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所開設25周年にあたり、祝辞を伝える機会が与えられたことは、私にとり非常に名誉なことであり、深く感謝いたします。

ネパール語の講師として、駒ヶ根訓練所で勤めたこの25年間は、充実した非常に幸せな時でした。長い駒ヶ根生活で出会い、教えてきた候補生方との忘れられない思い出とともに、いずれは私の祖国ネパールへ帰ることになります。私は、開発途上国に関心を持ち、援助しようと青年海外協力隊事業に自らの意思により参加しようと決めた、若い青年達の勇氣、情熱、エネルギーに深く敬意を表します。それは、大きなチャレンジであり、彼らの人生を捧げることであります。青年海外協力隊へ参加する前、多くのボランティアはこれから赴任する国の名前を聞いたこともなければ、そこに行くとは思っていませんでした。青年ボランティアの行う役割は、他の外交官よりも現地の人々の生活ベースに密着しています。現地の人々と

同じような暮らしをし、苦しみや悲しみを共にすることで、人々が必要としている物や問題を明確に理解しており、それを、レポートを通してJICAへ直接伝えることができます。彼らボランティアは、日本では体験することができないような多くのすばらしい経験をするでしょう。現地の人々に技術を伝えるだけでなく、彼ら自身が現地の人々から学ぶことにより、日本の近い将来にも利益をもたらすことにつながります。

最後に、献身の心を持つ全ての青年海外協力隊へ、そして、JICAを支援する日本の人々へ心から感謝申し上げます。JICAの崇高な活動が成功し、長く素晴らしいサポートがこれからも続くことを期待しています。そして、民族や、肌の色、宗教に関係なく、開発途上国の平和と発展を創造するという目標を達成してください。

心より、皆様の成功をお祈りいたしております。

It is my great pleasure and privilege to have given me this opportunity to give this complimentary message on the occasion of the 25th anniversary of JOCV year.

First of all, I feel myself that I'm very fortunate to have completed my 25 years at Komagane training center as a Nepal language instructor. Well, sooner or later, I will be going back to my country with many sweet unforgettable memories of volunteers whom I met and taught here during my long stay in Komagane. I really deeply appreciate the courage, spirit, energy and quality of these young men and women possess by joining JOCV program on their own will and decision in order to know and help the developing nations. It is a big challenge and great sacrifice in their life. Before joining the JOCV, most of these volunteers had never heard the name of their assigned countries or imagined going there. The role played by the young volunteers is closely rooted with the native people then by those other diplomatic ties. They are the one who live like a native, share all the pains and sorrows and clearly understand their needs and problems. Then these volunteers can convey to JICA directly through their reports. In return, these volunteers will have many advantages and experiences many things which they will never have any chance to experience once they return. This means that they will not just teach their tech. Skill to the people but in return they will learn more which will benefit to Japan in the near future.

In conclusion, I would like to express my heart felt gratitude to every JOCV volunteers for their great contribution as well as to the people of Japan who have supported the JICA program. I hope that JICA will continue rendering its long outstanding support, good will mission successfully. And accomplish its goal by creating peace, and progress in the developing nations irrespective of race, color and religion. I wish every success from the bottom of my heart.

Sincerely  
Lobsang T. Sherpa

## 回 想


 訓練スタッフ代表  
 氣賀澤 みはる

市報こまがねで見つけたJICA臨時職員募集、縁あってここを訪れたのは昭和54年10月の事。何カ国もの挨拶が飛び交い国名を耳にするたび、どのあたりだろうか？世界地図が手放せない戸惑う毎日。青年海外協力隊って何？開所当時は殆どの人から聞かれたものです。その頃エコーシティー駒ヶ岳の前身、駒ヶ根有線放送で通信員をしていた父が協力隊の事を紹介してくれた事を思い出します。早いものであれから四半世紀、頑張って来て!!そして元気で帰って来て!!と送り出した隊員1万千人。訓練も80回を数えます。2年後、見違える程遅くなっていったばい笑顔と土産話を持って帰国した隊員と再会。そのパワーを分けてもらい、今度は彼らの後輩達のために一緒になって手助けが出来る。こんな嬉しい事はありません。

生活技法講座、漬物で母を呼んでいただき、私までもが緊張して講師を務めさせていただいた時期があります。現地から届くエアーメールをドキドキしながら開けて見ると、とても役に立っていると現地の活動の様子を知らせてくれ本当に嬉しかったです。

自主講座では現地料理研究会や日本文化を学ぶ会の茶道や華道等に一緒に参加したり、真白い息と湯気の立つ雪の中、事務局長、駒ヶ根市長、候補生有志参加のもと餅つき大会をした事もあります。又、郷土料理の五平餅づくりでは

候補生、語学講師、職員とその家族が、我家いっばいに集い雑壇の前で味わった事や、毎日畑に通って野菜作り、地質調査、やきもので野やきをしたグループ、現地の養護施設で生活を共に活動するというAさんは農業体験、溶接を主人から学ぶため毎週通って来ました。又、我家の田植えに10人もの候補生が手伝ってくれて本当に助けられた事や、たった一度語学講師の有志と職員で駒ヶ根のイベント「サンバカーニバル」では民族衣装を身につけて参加し楽しかった事。このように多勢の人に出会えた事、職場で又、家族ぐるみで関わらせていただき、沢山の思い出が私の宝物です。

協力隊週間では駒ヶ根JCのメンバーを中心に市民育てる会の方々の並々ならぬご支援で、協力隊を盛り立てて頂き、所外活動受入先の皆様には毎回暖かく受入れて頂き、本当にありがとうございます。

駒ヶ根に根をおろして25年、市民の皆様のおかげでしっかり根付き成長しはじめました。私も今迄と同じように微力ながらできる限りのお手伝いをさせて頂き、世界中へ飛び立つ青年達にアルプスが二つ映えるまち駒ヶ根よりエールを送り続けたいと思います。駒ヶ根を巣立った隊員OBの方々、職員スタッフOBの方々、ご家族、友人を連れていつでも遊びにおいでください。お待ちしております。

## 食堂で働く皆さんより

## 「こんなこともありました」

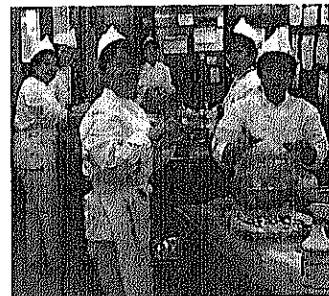
TBS食堂チーム

皆さんに食事を作っている長い間にこんなことがありました。

- ①壮行会のパーティーの時に食堂の窓から網戸ごと外に落ちた人がいました。
- ②規則を破ってバツ当として食事当番してくれた人がいてとても助かりました。またお願いします!!
- ③必ずおかずの匂いをかぐ人がいます。(これはかなり大勢います。)
- ④希望喫食で希望していないにもかかわらず、食している人が毎隊次かからず1人はいること！人って面白いですね～。

私たちは“おいしい!”という言葉聞きたく、今までもそしてこれからも頑張らせて頂きます。

## TOPICS



## 明日を開く若人達へ



所外活動受入先農家（花卉農家）  
山本博和

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所開設25周年おめでとうございます。

私が候補生を受入れて既に20数年、この間多くの方が私の農場を訪れてくださいました。全国から集まる若い候補生の皆様と直に交わりを持つことは、本当に楽しいものです。受け入れを始めた当時は、私もまだ若く、時に年上の隊員候補生もおられました。また、隊員を目指す方というのは得てしてそういうものなのか、過去には豪快で個性的な方も数多く、大変懐かしく思いだされます。

駒ヶ根を巣立ち、その後、2年間途上国で生活される皆様に期待することがあります。せっかくの2年間です。日本を離れ、現地の人々との交流を通し、たくさんのかんじを感ずてほしい、そして、自分自身を高めて帰ってきていただきたいと思うのです。海外に出られ生活をされるという経験は、1つに日本をこれまでとは違つた目で見つめることができるようになるということでしょうか。そんな皆様が、これから益々日本全国に増え、人々の核となり、今後の日本の流れを良い方向へ変えていく原動力になっていただきたいと思うのです。

そして、世界の人々のスタンダードである、家庭を大事にする、そんな方になってほしいと個人的に願うところです。

若いうちしかできないことがあります。皆様が協力隊員としてチャレンジすることは、この後の人生に素晴らしい恵をもたらすことでしょう。現実の社会では、帰国後の就職活動等に隊員活動が必ずしもプラスにならないこともあると聞いています。しかし、既にこれまでの価値観から一回り以上も大きくなつたグローバルな考えを持ち、日本の真髄を見つめることのできる皆様です。どうぞ、自信を持ってご自分の夢を実現していただきたいと思います。その力が皆様にはあると信じています。

最後になりますが、訓練所の益々のご発展をお祈りいたしております。そして、この訓練所に学ぶ、金の卵と呼ぶにふさわしい候補生の皆様に、今後も心より応援してまいりたいと思います。

元候補生の皆様、是非また元気な姿で私の農場を訪ねてきてください。その際は、自慢のカーネーションをたくさんプレゼントしますからね！

## TOPICS

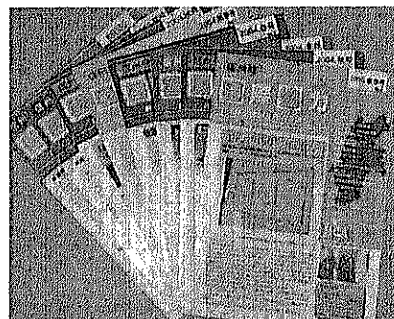
## 駒ヶ根訓練所NEWS紹介

駒ヶ根訓練所では平成15年4月から『信州発国際協力 駒ヶ根訓練所NEWS』という機関誌を発行しています。訓練の様子、地域との交流行事、長野県出身JICAボランティアの皆さんの活動報告など、「協力隊訓練所」と「JICA国内機関」の2つの顔を持つ特徴を生かして編集しています。

年4回の発行はネタ探しのにも作業としても決して楽ではありません。しかし、大きなイベントなどだけでなく、所外活動先のインタビューや訓練生活を写真で振り返るコーナーを設けるなどして、情報発信ツールとしての認知度はだんだん高まっていると感じています。2005.新春号(第8号)には訓練所スタッフの協力を得て「新春特集・世界のジェスチャー」を掲載したところ、地元紙に好意的に取り上げてもらいました。

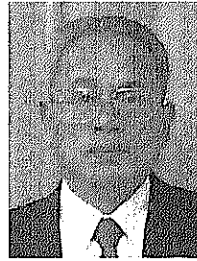
高まる期待と裏腹に、募るばかりの担当者の負担…。それでもなお、締め切りは確実に迫ってきます。

JOCAスタッフ 柴山良春





# 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所 25周年記念に寄せて



社会福祉法人伊南福祉会  
特別養護老人ホーム観成園  
園長  
福島紀六

このたび、駒ヶ根青年海外協力隊訓練所開設25周年記念を迎え、心からお祝い申し上げます。

昭和54年開所以来四半世紀に渡り、訓練所として果たした国際貢献は多大なるものがあると思います。またこの間訓練所の使命のためにご尽力されて来られました、職員の皆様には本当にご苦労様でございました。一市民として、また訓練生の所外活動事業所としても感謝を申し上げます。

当観成園は、老人福祉施設として福祉理念に基づき、我が国が、そして世界の人々が豊かで安心して、生活と人生を送ることができるよう、諸外国との交流を促進し国際的視野にたち福祉の推進に資するよう努めることを掲げています。

観成園が、訓練生の所外活動先事業所として選ばれたのは、駒ヶ根訓練所開所と略同時期であり、この25年間に450名余の候補生と関わってまいりました。

開発途上国への貢献の在り方には物と心の両面ありますが、真の貢献は人と人の心に関わる事であり『搦いた餅より…心持ち』これに勝るものはないのではと思います。

その意味におきましても、所外活動として福祉施設実習は青年海外協力隊の目的に掲げてあります開発途上国の、国づくり、人づくりに欠かすことのできない最適と思い、今後も積極的に応援させていただければと願うところです。

昨今、世界的には対人間感、又、思いが互いに理解が得られず世情不安益々先行きを危惧するところですが、実習訓練生との会話で、今こそ私たちが出来ることは、青年海外協力隊員として『自分の知識や技術を活かし、発展途上国とその人々のために貢献したい』という崇高な志に感銘するものです。

日本は世界に先駆けて、JOCV意欲あふれる若者が、地域住民と一体となった協力を実施されていると聴き及んでいます。

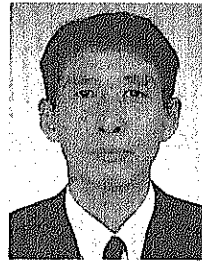
開発途上国の期待は大変に大きなものが御座います。更なる発展に向けてご尽力くださるようご期待申し上げます。

おわりに、駒ヶ根青年海外協力隊訓練所の益々の発展と、関係皆様の御健勝を心から祈念申し上げます。お祝いの言葉といたします。



所外活動を終えた隊員候補から届けられたお礼の色紙。候補生は各受入れ先農家・施設等で貴重な経験を積ませて頂いています。

## 駒ヶ根青年海外協力隊 25周年記念に寄せて



昭和56年度第1次隊  
視聴覚機器／モロッコ  
青年海外協力隊OB代表  
上田 誠一

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所開設25周年おめでとうございます。もう25年、まだ25年、と感慨深い四半世紀の節目です。駒ヶ根訓練所で訓練を受けたのが、つい昨日のようです。

昭和56年度第1次隊ですから、昭和54年度1次隊から訓練を開始した駒ヶ根訓練所で丁度3年目の訓練隊次です。当時は、全派遣国の候補生が現在ほど多くなく、1隊次の全員が一同に訓練を行なっていました。全候補生が広尾訓練所で約1か月、そして駒ヶ根訓練所に移動して約2か月の訓練でした。また、広尾から駒ヶ根に訓練所を移動する途中に禅寺での参禅訓練、登山訓練、野外訓練や駒ヶ根での所外活動、また駒ヶ根での訓練終了後に東京代々木に移動し、訓練の仕上げとして皇居外周のお堀を2周するマラソン大会もありました。思い起こすと盛り沢山の訓練内容でした。広尾訓練所では、主に国際協力や協力隊活動の基本や概念等の理解を行なう訓練内容で語学訓練は一切ありません。そして、駒ヶ根訓練所に移動してからがたいへんです。ほとんどの時間が語学訓練でみっちりとな行なわれました。そんな一連の訓練の中、やはり駒ヶ根訓練所で得たものは格別でした。当時の訓練所施設は現在の半分程度の大きさで、訓練所の周辺は現在以上に木々の緑が生い茂っていたと思います。それこそ山に籠っての修行という感じでした。116名の候補生、訓練所職員や関係者、そして訓練所の限られた空間、それまでに経験のない密度の濃い時間でした。現在の訓練でも同じ状況と思います。

そんな状況下での訓練、得たことはたくさんありますが、同期の候補生から学んだことは今でも宝物です。年齢、業種、出身地、経験などの違いは元より、能力的にも人格的にも優れた方が多く、右も左も分からない私にとって、学ぶことばかりの訓練生活でした。また訓練に携わっておられた職員の方々も熱意と規律を持って指導にあたられる一方、フランクで個性的な方が多く、これまた学ぶことばかりでした。貴

重な経験です。

駒ヶ根での当時の訓練を振り返ると、同期の訓練候補生、訓練指導員、食堂や施設運営のスタッフ、所外活動先の方々とは日々接する中で、協力隊員のあり方の様なものを学んだと思います。実際、任国での活動や生活を振り返ると派遣先での上司や同僚、地域の人々との人間的な関わり方一つで、仕事や日常生活がうまくいったり、いかなかったりと思い当たった時には、訓練中の同期候補生や協力隊関係者の姿をお手本に良好な関係をつくるキッカケを掴んだことを思い出します。

結局は人間関係。協力隊活動の成果が上がるか否かは、良い人間関係をつくる術を持っているかどうかとつくづく思います。駒ヶ根での訓練は何だったか。思い起こしながら突き詰めれば、良い人間関係をつくる術を身に着ける、あるいは手掛かりやキッカケを考え学ぶための訓練だったように思います。

世の中全体が経済的、効率的、省力化等々と時間や手間暇をかけないことを良いこととし、それを優先する現代。せめて駒ヶ根での訓練は、時間や手間ひまを惜しまず、人と人との関係を大切に考え、その術をそれとなく教わる訓練所であり続けることを望みます。隊員が派遣国の人々と良好な関係を築き、思う存分協力活動が行なえるように。駒ヶ根訓練所関係者の御健闘をお祈りします。





## 協力隊のあるまち駒ヶ根に生まれて



平成14年度第1次隊  
幼稚園教諭／モルディブ共和国  
青年海外協力隊OG代表  
北原 照美

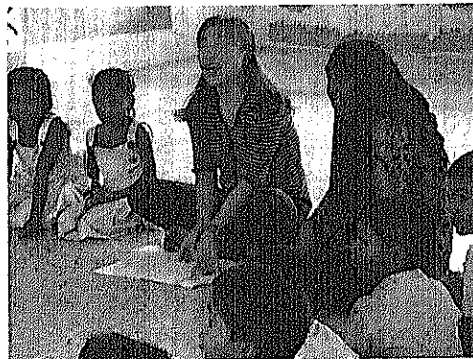
学生のころから、いつか国際協力活動に携わりたいと思っていた私をはじめ駒ヶ根訓練所にお世話になったのは駒ヶ根市民としてお手伝いをした“協力隊週間”のときでした。この経験を通じて世界と駒ヶ根と自分が“協力隊”によってつながっていることの面白さを発見し、次は応援するばかりでなく自分も現地で活動をしたいと思うようになりました。そこで2002年7月から2004年9月まではモルディブ共和国で幼稚園教諭隊員として活動をしてきました。

候補生として過ごした訓練所生活はその大半を語学勉強に費やし、国際協力について幅広く講義を受け、時に所外での活動を通じ地元の方々と交流をし、共同生活を営むための当番・委員会活動等を行い、自由時間を仲間と満喫するといった多忙で非常に密度の濃い毎日でした。“候補生”というのはいずれ任国でなにかしらの指導にあたる人たちですから、200人いれば多種多様な200人のプロがいるということでした。例えば、みんなで運動したいねと言えばスポー

ツコーチたちがクラブを作り、試合中に捻挫をすれば看護師が手当てをし、リハビリが必要ならば理学療法士が指導するといった具合です。あれほど手に職があり行動力がある人が集まっているというのはすごいことです。もしあのメンバーだけで村を作ったとしてもおそらく不便なことなく暮らせるだろうと思われました。

職員の方々も隊員経験のある方が多く、異国に住んだ経験者として訓練以外の面でも、赴任前で疑問や不安をもつ私たちを様々な立場から支えてくださいました。

勉強から生活全般まで多くの体験をした訓練生活というのは、派遣のための“準備”というような付帯的なものではなく、それ自体が主役になり得るほど意味のある充実したものでした。あ那时的仲間、職員の方、地元の方との思い出は、任地へ行っても色あせず異国の地での大きな支えでした。駒ヶ根市出身ですので、これからは隊員OGとして訓練所とかかわり続けることができれば幸いです。



「以前に比べ子供達が生き生きとしてきて、幼稚園に来るのを楽しみにしている」と充実した隊員生活を振り返る北原さんの活動写真。

